

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 胡斯楞

論文題目 中国少数民族を題材にした映画における内モンゴル牧畜社会の表象—映像人類学的視点から—

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 星野 幸代

委 員 名古屋大学教授 水戸 博之

委 員 椋山女学園大学教授 田所 光男

委 員 内蒙古大学 (中国) 哈斯額尔敦

本論は、中国の少数民族としてモンゴル人を題材にした映画を研究対象とし、市場経済化が急激に進んだ中国の辺境地域における内モンゴル牧畜民にとって牧畜社会とその伝統文化の在り方の変容は如何に表象されてきたか、すなわち、内モンゴルを題材にした映画における牧畜社会の変動の側面を明らかにすることを目的としている。

以下、本論文の概要と審査結果を報告する。

[本論文の概要]

序章では、本論において使用する概念を定義した上で、少数民族を題材とした中国映画の起源と改革解放後のその発展について、内モンゴルを題材とした作品に即して跡付けている。

少数民族を題材とした映画を取り扱う際、多くの研究や報道記事において、「民族映画」、「少数民族映画」、「少数民族を題材にした映画」という三つの概念について十分な検討が行われてこなかった。本論では、「民族映画」とは「中華民族全体を対象領域とし、中国映画全般を指す」ものとし、「少数民族を題材にした映画」はその中の一ジャンルであり、さらに「少数民族映画」はそのジャンル内の一部として限定する。「少数民族映画」とは、「少数民族の社会文化を記録することを主旨とし、形式と構造上少数民族の人物像、少数民族地域での出来事と、少数民族文化の「身份」の監督と脚本家により、少数民族の言語を使った台詞で作られた映画」という概念を提起した。ここでいう文化的「身份」とは、伝統や習慣によって結び付けられた地域、宗教や民族といった集団的まとまりを背景とする心性、生活様式、文化の教養、利害的な関心を共通認識として持つことを指す。

中国において初の少数民族を題材にした映画は、内モンゴルを舞台にした映画『内蒙古春光』（1951）とされる。少数民族を題材にした映画の創作は、政策として少数民族の登録が行われた「少数民族識別工作」（1953）の前から始まっている。当時の映画の構造は、基本的に共産党、国民党または日本帝国主義、モンゴル人という三つの体制が並立する中で、モンゴル人の人々が共産党の指導のもとで、もしくは両者が力を合わせて一連の戦いを経て、最終的に勝利するという流れである。

『内蒙古春光』は当時の階級闘争に沿って創作された典型的な作品であるが、モンゴル人の上層部に悪役が登場したため、共産党の指導を受けて修正や変更を経てようやく上映が許された。党の方針として、少数民族政策としては階級闘争の方は保留され、モンゴル人の上層貴族の中から有用な力を集め、統一戦線の下で反動勢力である国民党と戦うという演出がなされた。つまり、当時の映画は客観性より国家のイデオロギー宣伝を重視していたのである。建国間もない50年代中国では、少数民族を含む広範な大衆の支持基盤を固める必要があり、そのため国策としての教育と宣伝の手段として、少数民族を題材にした映画も利用されていたことが分かる。さらに当時は映画産業がすべて国有化されていたため、制作方針も国家の制作と映画製作に関する指示にしたがわなければならなかった。改革解放後は、国家による統一買い付け・統一配給方式が崩れ、映画の自由競争の時代へと移行した。

第一章から各論に入る。第一章では、文化大革命において「上山下郷」運動に応じ、内モンゴル自治区で牧畜民生活を体験した作家張承志の小説を映画化した作品『黒駿馬』（1995）における内モンゴル牧畜社会を検討した。主人公のバインボルグは内モンゴル草原で育ったものの、新中国のもとで学校教育を受け、都市の「文明」に染まり、草原の人々の思考が「立ち遅れ」た「野蛮」なものと思うようになる。それは「文明」と「野蛮」との対立的描写と解釈することもできる。知識人として民族文化の「解釈者」でもあり、また自ら少数民族として観察される「沈黙者」でもある苦痛は、彼と草原との間に精神的な乖離を生み出した。作者は物語に自己を投影させることで、そう

した矛盾の解決を導き出そうとした。しかし『黒駿馬』という作品は、内モンゴル草原の歌、文化、風習などを「下放」青年の視点から描いた作品でしかなく、換言すれば、作者張承志が理想とする内モンゴル草原を描いた作品であることは明らかである。

第二章では、生態移民政策が実施された地域での物語『トゥヤーの結婚』(2006)を取り上げた。この作品は、内モンゴル自治区の西部地域の降水量の減少と、それによる河川の枯渇、さらに草原の不合理な開発など人的要因による草原の砂漠化などを背景としている。映画を貫くキーワードは、本来内モンゴル牧畜社会に縁のなかった「井戸」であり、それは定住化による生活様式の変化を表現し、漢文化記号の一つと言っても良い。また、この映画における人物はそれぞれ記号化された社会背景を表している。変わりゆく自然環境と社会の中で生き方の選択を迫られているトゥヤーは牧畜民の代表であり、もとブフ(モンゴル相撲)の選手だった夫バートルは伝統文化を象徴している。重機で石油を掘削して成功したボリルは現代化を意味し、隣人セングーは最初トゥヤー一家を救済するものの、バートルと同様の事故に遭ったことから伝統的な牧畜生活は復活し得ないというメッセージが彼のキャラクターに込められていると解釈できる。本作はこのように、現代化にともない伝統的な牧畜生活が壊滅的危機に陥っているという問題を提起した。しかし、モンゴル民族内の会話という設定でモンゴル語を使わないことは実情に合っておらず、漢族の居住地域で起きた「嫁夫養夫」を内モンゴルに移いするなど、この映画は真実と想像の混合物であるといえる。

第三章では、『白い馬の季節でき 2005)』を取り上げ、主人公ウルゲン一家の境遇を通じて、市場経済の影響を受けて牧畜文化を捨てざるを得ないモンゴル人の問題を提起している。そこには、気候変動、漢族の人々の流入、草原をつぶして作られた農地の拡大など多数の原因が絡み合っている。従来の放牧業では人間と自然の共生が保たれてきたが、政策によって鉄条網で牧草地が分断され、定住型の放牧に移行させられたために、家畜が牧草を根絶やしにし、草原は砂漠化した。しかし政府側からはその原因は牧畜民の遊牧であると断定され、遊牧民は草原から追い出された。本作には、都会から草原へ逃げる漢族という皮肉な表象も交えつつ、経済的な外圧に対して抵抗し、譲歩する主人公の姿、また葛藤しながらも異文化を受け入れる妻を対比して描いている。最終的にウルゲン一家が牧畜を手放すまでの葛藤は、同じ条件に身を置いている大勢の牧畜民の姿を代表している。

第四章では、内モンゴル初の自主映画とされる『バトの物語』(2016)を取り上げ、混合言語形成の背景および実態、さらに伝統文化の変遷を考察した。この映画は、現代化の波にさらされ急速に変貌する牧畜社会の中で戸惑うモンゴル青年を描いている。彼と周囲の人物とが話す、中国語の影響を少なからず受けて混合言語を成すモンゴル語表現は、内モンゴルの東部地域におけるモンゴル族の人々の言語生活の問題を内包しており、さらに少数民族のバイリンガル教育の目指す理念と現実の落差を読み解くことができる。主人公たちの言葉には、民族的アイデンティティを構成する複雑な文化体系の取り上げある少数民族言語に混じる漢語の割合が増えつつある実態が現れており、徐々に薄れていく民族文化の悲劇をも反映されている。本章は前の三章と異なり、言語生活の側面からモンゴル牧畜社会の伝統文化の変容を考察しており、学術的視点やアプローチの多様性を提示した。こうした内モンゴルにおける言語生活の問題は、モンゴル人によるモンゴル語取り上げる制作者であるからこそ提起することができたといえる。

内モンゴルを題材にしたい代の映画を考察することにより、内モンゴル牧畜社会の表象という問題は、内モンゴで題材とした映画の歴史と常に併存していることが分かった。少数民族映画に表象された内容を取り上げる際に、単に製作者が少数民族であるか否かで、「他者」の視線と「自己」

の見解とを分類することはできない。視聴者それぞれの受容という過程を経てはじめて「あるモノ」の「表象」が成立するとすれば、多民族国家の一員としての内モンゴル牧畜社会の今日の「表象」は「他者」と「自己」の視線を内包してこそ、実情を「表象」しているといえよう。

[論文の評価]

本論は、モンゴル人としてモンゴルの言語文化をアイデンティティとし、かつ中国人でもある申請者の個人的背景が分析に存分に生かされた論文となっている。文化的・政治的・歴史的背景への考察を掘り下げることによって、それぞれの映画が深部でモンゴル民族の文化とコミュニティ、および環境に対する破壊と抑圧を如何に表現しているかを、確かな裏付けを以て鮮やかに分析させている。作品の背景について先行研究に基づき、映画内の事件の要因、経過、結果への考察を加えていくことによって、映画表象を通じた優れた文化論となっている。自然環境に関する問題提起としては、従来は自然そのものに対するフィールドワークの分野からなされてきた。それに対し本論では文化研究の立場を取ることによって、はるかに自由に研究者の能動性が発揮されている。本論は農耕民と遊牧民の対立という人類文明史に遡る問題に発し、伝統文化の喪失といったローカルなもの的重要性をつきつけ、産業社会による地球の破壊といったグローバルな問題に迫っており、二十一世紀に人類が避けては通れない課題を提起しているともいえる。

いっぽうで、本作の目的に照らしてふさわしい研究対象としての映画は申請者が取り上げた以外にも見られるのだが、本論の選択基準は必ずしも明らかにはされていない。牧畜社会の変容と選択された四つの代表作は、時系列的対応を前提としていられること、網羅的とまではいかなくとも、モンゴルを題材とした主要作品群を一通り編年的に解題とともにリストアップした項目または資料があれば、作品自体から選択基準がより明確になったであろう点が惜まれる。また環境問題と言語問題が取り上げられているのは評価できる反面、いずれかに集中して映画を体系的に選べばさらに論が深まったであろう。理論面では、人類学をはじめ幅広い理論を採用している反面、分析の深さという点では物足りない部分もある。また、本論が表象と現実のつながり方に意識的であるのは評価できるが、当事者が必ずしも最良の語り手ではないことに留意し、「正確」に表象しているか否かではなくより柔軟な姿勢が求められよう。

しかしこれらの課題は本論文の全体的な評価を損ねるものではない。モンゴル民族であり、モンゴル母語話者である申請者の経験に根差したオリジナルな視点と分析、指摘は比類のないものであり、少数民族映画研究、映像人類学、比較文化学いずれの研究分野においても優れた貢献を果たしたといえる。また、折しも中国政府が内モンゴル自治区の学校教育の歴史政治科目においてモンゴル語を使用言語としないことを決めたというニュースがあり、本論の映画分析を通じた問題提起は現実に差し迫った民族の危機を学術的に裏付けているともいえる。

したがって、論文審査委員は全員一致で、本論が博士学位論文として水準に達していると判断した。